

環境科学部

環境生態学科のこの一年

伴 修平

環境生態学科長

学生の動向

2015年4月には32名の新生を迎えることができた。2016年3月16日現在、欠員はでていない。2年生と3年生はそれぞれ30名と29名が在籍しており、4年生はつい先日29名が無事卒業した。5年生以上は3名で、2年生以降には2名の休学者がある。アベノミクス効果なのか、近年の就職状況は好転しているようで学生の就職率は期待以上に良かったが、会社訪問の解禁が夏以降に変更されたことによる混乱は避けられなかった。来年度はまた元通りになるとのこと。就職事情の混乱はまだまだ続くようである。

教員の動向

2016年3月には永淵修教授が定年退職された。長年続けられてきた越境汚染の研究は、退職後も続けられるとのこと。大気汚染の研究は今後ますます重要になってくるだろう。さらなるご活躍をお祈りしたい。一方、本年度は、2名の新任、小泉尚嗣教授と吉山浩平助教を迎えることができた。それぞれ、防災学と数理生態学がご専門で、これまでの生態学科にはなかった新しい風を吹き込んで頂けるものと期待している。また、2016年4月には丸尾准教授が教授に昇進される。こちらにも新しい求心力として学科を牽引して頂けるに違いない。

学科の動向

本年度は、特に大きな出来事はなかったが、B3棟およびB4棟外周と廊下の不要物品を一扫できたことは大変喜ばしい出来事だった。不要な物品とはシステムティックに処分されないが故に蓄積されてしまう厄介者で、それをおける場所があれば必然的に増えてしまう不都合な真実でもある。環境科学部なのだから、これは大変遺憾なことであった。建物外周のゴミは見てくれを低下させ、廊下に放置された物品に至っては防災的な観点に立っても即座に撤去されるべきものだった。いま、過去20年間の悪しき蓄積はようやく一扫されつつある。やれやれ。しかし、言われてから実行に移したのでは、こどもである。言われなくとも常に整理整頓できる大人になりたい。

少子化が叫ばれて久しい。大学運営も徐々にまま

ならぬものになって行くのか。もはや象牙の塔に閉じこもっているわけにはいかないとことだろう。個人的には応用研究だけが社会貢献に必要とは思わない。研究者以外の人にも容易に説明可能であれば、基礎研究も十分に大切と思う。ただ、独りよがりにならないことは重要で、必要とされることを真摯に実行することが、おそらく社会貢献にもつながり、本学の認知度を高めることにもなるのだろう。精進したいです。

環境政策・計画学科のこの一年

上河原 献二

環境政策・計画学科長

2015年度は例年になく少ない教員で対応した変化の多い年であった。まず、4月に41名の新入学者を迎えた。内訳は、推薦8名、前期一般22名、後期一般11名であった。また、①環境計画、環境システム、リサイクル、②環境負荷削減政策、③環境教育を研究されている和田有朗准教授が着任された。

2014年度末に明らかになった経理上の事案を学科としても重く受け止めて、関連する改革を行った。具体的には学科教員が長期出張を基本的に避けるべき期間の設定、卒業研究指導における複数指導制の一層の強化などである。また、2015年度は、諸般の事情から、かなりの人数の新4回生の研究室配置換えがあった。

2014年度に引き続き、2015年度も、学科広報に力を入れた。その柱は、学科ホームページの充実とオープンキャンパスの強化であった。学科ホームページには、2014年度に引き続き、毎月交替で教員がコラムを掲載した。学科教員の姿が高校生にも見えるようにとの努力である。また、オープンキャンパスでは、初めてB0棟学生ホールを会場とした。会場デザイン・設営者の努力もあって、見栄えのものとなった。主な内容を三つ紹介する。第一に、2014年度から引き続き、「そうだったか!『もののけ姫』が挑んだ環境問題」と題して、学科教員それぞれの専門から『もののけ姫』を読み解いた内容を紹介する特別講義を行った。第二に新しくミニ環境フィールドワークを行った。犬上川河口に高校生を引率して、河口の砂州から琵琶湖の景色を見てもらい、また侵略的外来植物ナガエツルノゲイトウの抜き取りを体験してもらった。第三は、室外スペースも活用してコーヒー等を提供しながら在学生在が高校生と話す「カフェ」であった。在学生在、卒業生の協

力を得て活気あるものとなった。

11月から小野助教がめでたく産休・育休に入られた。さらに女性が活躍する学科でありたい。

11月14日には、学科(前身である「環境社会計画専攻」を含む)設立20周年を記念して同窓会を、彦根ビューホテルにて開催した。卒業生108名、退職教員6名、現学科教職員10名が参加した。卒業生が第一期から順番に前に出て近況報告をするとともに、退職の先生方からも当時の思い出などをお話いただいた。学科の過ぎ来し方を振り返り、旧交を温める良い機会となった。

入学試験に関しては、前期一般入試の倍率が約6倍となったことが特筆される。年度ごとの上下動もあるため、倍率が急上昇した要因を特定することは難しいが、近年の広報努力も一部寄与しているのではと推測する。

2016年3月には37名の学生が卒業を迎えることができた。彼らは、1回生のときから、インタビューを含めた調査を行い、結果をまとめて大勢の前でプレゼンテーションを行う訓練を積んだ。3回生半ばからテーマを決めて研究を始め、4回生では卒業研究をまとめて発表会に臨み、査読者の意見を踏まえて修正して卒業研究を完成させた。資料をまとめて人前で説明する作業は、社会人になってから繰り返し行うことになるものである。その意味で、当学科の教育の仕組みは、「社会に出て役に立つ」ものだと信じる。卒業生はそれを誇りに思って社会で活躍してほしい。

2016年3月末には人事異動があった。地球温暖化対策の経済分析研究などで活躍された松本助教が退職され、長崎大学環境科学部准教授に異動された。また、環境計画分野の研究や自転車を通じた地域貢献などで活躍された近藤教授が退職され、新しい道に進まれることとなった。さらに学科の事務を長年務めていただいた米野さんが、2016年4月から人間文化学部の研究室の専任となって当学科は辞められることとなり、替わって森さんが着任された。

環境建築デザイン学科のこの1年

高田 豊文

環境建築デザイン学科長

本学科の教員定数は14名であるが、昨年度末に張晴原教授が他大学に異動されたこともあり、今年度は教員12名のスタートであった。半年間は12名の教員体制であったが、7月に白井宏昌先生を准教授と

して迎えることができた。白井先生は、早稲田大学大学院を修了後、民間企業での勤務とロンドン大学博士課程での研究を経て、建築設計事務所を共同設立されており、これまで建築・都市の設計に携わると同時に、近現代建築および都市の歴史について研究されてきた。特にロンドン大学在学時には、シドニーとロンドンの2つの夏季オリンピック開催都市を事例として、オリンピック招致前後の空間利用計画の変遷とその背景となる歴史的・政治経済的要因に関する研究を行ってこられた。本学科でも、設計演習科目の非常勤講師を数年間務めていただき、研究と実践教育両面で優秀な人材として、今年度途中から本学科のスタッフの一員に加わっていただいた。また、芦澤竜一准教授が、インテリア・建築・ランドスケープなど多様な分野を横断した設計活動や環境技術を応用した建築設計のこれまでの優れた業績が評価され、10月に教授に昇任された。芦澤先生は、自然要素を積極的に取り入れた建築作品や、近代技術と伝統技術との融合を試みる作品など、建築設計に対する環境技術の応用可能性について意欲的に設計・研究を進めてこられた。これらの成果は国内外から高い評価を受けている。芦澤先生と白井先生には、今後の設計・研究活動の益々のご活躍を期待するとともに、本学科の設計教育だけでなく、大学運営に対する貢献も大きく期待したい。また、ヒメネス・ベルデホ・ホアン・ラモン准教授は、2015年日本建築学会著作賞を受賞された。日本とスペインの国際共同研究体制を構築しつつ、スペインを中心としたグリッド都市の世界的普及という現象を明らかにした著書に対する表彰である。その他にも、個々の教員が教育・研究・地域貢献・国際交流の活動を進めており、今後の益々の活躍を期待される。

学科の教育面を見ると、今年度は55名の学部卒業生を輩出することができた。卒業研究・卒業制作の内容には、地道にかつ丁寧に取り組んだ成果として、非常に優れたものが多く、周辺環境との関係で建築をとらえようとする環境建築の「デザインマインド」が、学生の中に根付きつつあると感じられる。

さて、新年度の4月には新しい教員を迎えて、本学科教員定数の14名でのスタートとなる予定であったが、年度末に松岡拓公雄教授と高柳英明准教授の異動が明らかとなった。松岡先生は17年、高柳先生は10年もの間、本学科の研究・教育に多大な貢献をされてきており、学科として計り知れない損失である。しかしながら、両先生の深い思案の結果であり、異動先での今後のご活躍を祈念しながら、門出を祝いたい。教員の異動によって、時代の移り変わりが